

人工4W-62

376-36



河瀨蘇北著

現代之
人物觀
無遠慮に申上

東京 二松堂發行

大正
6. 12. 8
内交

て渠も亦胸を曇らしたものだ。かくして發した二人の戀は、却々に變るかたもなかつた、花井、榮の艶話は、幾度か新聞に傳へられ、不忍の池の水鳥の噂にも上つた。然し戀は遂げられぬのが本當だ。とみ子は泣いて而して遂に十年の戀を忘れねばならなかつた。嫌で別れた仲ではない、十年の間の思ひ出はつきぬ。法學博士となり、代議士となり、曰く何、曰く何と花井がめきく賣出したその蔭には、とみ子の嬉しい笑顔があつた、それが今は昔語りの種となつたのだ、忘れやうとして、何で忘れられるものか。とみ子の家は、もとく水稼業ではない。父は幕末の劍客として知られた淺利又七郎である。當時湯島の藝者であつた母との間に出來たのがとみ子兄弟であつた。明治維新で一家没落、湯島に一方と云ふ待合を出したのが、とみ子が榮となる可き階段であつた。母から享けたやさ姿、生へ際の綺麗なきれのよい目、鼻筋の通つた、面長の貌、筆者は、伊豫紋の奥座敷、渠女が、張りある聲で、のろけをきかせた昔が思ひ出されてならぬ。左團次君には甚だ失禮。

失戀の女橘 糸重

水彩畫家の

鳥崎藤村が、詩人から小説家になつたその時代に、「水彩畫家」と題する

女主人公柳

一篇を公にした事があつた。その後、この「水彩畫家」のモデル問題と云ふのが

澤清乃とは

起つて、畫家の丸山晚霞と作者藤村との間に一場の葛藤を生じたが爲めに、文學上の價値は第二として、評判の作物となつた事も、未だ記憶に存する事

と思ふ。その「水彩畫家」の女王人公、女流音樂家柳澤清乃こそ、筆者がここに捕へ來つた、橋糸重その人である。而して當時、糸重の戀の片相手は、晚霞だと稱せられたが、モデル問題葛藤の結果丸山ではなくして、實は作者鳥崎藤村自らであつた事も明かとなつた。糸重のやるせなき戀は、藤村が嘗て音樂學校の門を潛つた當時に於てきざした。藤村は當時「若菜集」によつて、天下の子女の涙と憧憬とを集め、その秀麗の優姿は、幸多き華の生涯を捧げんと焦慮する美人によつて包圍されて居た。愛の女糸重が相知つて、その胸の炎が火と燃えぬ筈があらう。而も藤村は、何故かこれを受くる事が出來なかつた。「水彩畫家」に描かれたるが如き理由であ

つたかどうかは疑はしいが、何故か藤村は、この血の出る様な戀を受けなかつた。是に於てか一篇の哀史は出来上つた。糸重は失戀の悲痛の胸を抱いて、涙に夜着の袖を濡はさねばならぬ事となつた。以來、ピアノのキイに打出さる諧音のすべて、その胸より歌ひ出さる、歌八百首は、悉くその忘れられざる一個の影、而も糸重には、もう指だも觸るゝ事の出来ぬ、文壇の第一人島崎藤村の爲めにする祈禱となつて了つた。糸重は、是れ以來、全く孤獨の人として立つた、感情の女、愛の爲めに生れた彼女としては、それが如何につらかつたかは、語るの要もなからう、才人佳人のかたらひには、必ず齎さる可き大詰ではあるが、さるにても餘りに面憎き神の判きではなかつたらうか。糸重は、音楽家としてよりは歌人として早く世に知られた、然しその歌は阪正臣や、大和田建樹の亞流で、たゞ一時代前に生れた老嬢の古いセンチメントに過ぎない、ピアノニストとしては、未だ何度と數へらるゝ程しか演奏をして居らぬが爲めに、世間の噂にも上らぬが、東京音楽學校教授としては、女ながらに正六位の位階を有し、高等官四等の首席教授で、溫柔多感なる良教師として、學生の信頼を一身に集めて居る。人若し縁深き東台の森の彼方、木立に洩るゝピアノの響きに、悲戀悲歌、岸にむせぶ小波のやうな、やるせない諧音をきく事があつたら、それは糸重の昔を思ふ、おもひ出のすさみ……一片同情の涙をそゝいてやるがよい。

艶女下山京子

一代の粹を
集めた築地
の一葉茶屋

筆者、下山京子を想ふの時、花散りそめた、暮れ逝く春の哀愁をしみじくと味ははぬ譯に行かぬ。京子の春は、餘りに飽氣なかつた。花の盛りは、餘りに飽氣なかつた。花の盛りは、餘りに短かつた。短く、飽氣ないのが、花のいのち、美人の運命であるかも知れぬが、それにしても餘りに淡く、薄くはなかつたらうか。築地に開業いた一葉茶屋、京子の花の盛りは、その一年餘りであつた。時事新報の女記者から、お茶屋の女將になつた事が、世に物言はむ輩の好奇の心をそゝつた。燃ゆる様な赤の前垂總縫模様の艶なるその衣装が、世の人の目をみはらせた、京子は謎の女、問題の美人として、ただ譯もなく持囃された。さくら花、はらりと臙夜に散りて、粉脂の香のゆるく流るゝ時、幾臺かの馬車自動車は、築地の横まちを縫うて通つた……蟲の音、草の裡に溢き秋の夜、月を浴びて、公子粹人の姿は、一葉茶屋の欄干に描き出された、蘭燈の影、金屏の裡、世に時めかんとする輩は、我さきに京子の肉と靈とを専らにせんとして、酔ひに酔うた。

醬油の商賣を休んで、白酒の大賣出しをやつたものだが、これが又江戸名物の一つになつて、
 舖前の雜聞は殆ど、言語に盡せぬ程であつた。慶安頃の繪圖を見ると、店の前には竹矢來を廻
 らして、出口と入口とを設け、入口の上には櫓を作らへて、其處には鳶のものと醫者がつめか
 け、萬一に備へると云ふ騒ぎ、賣場に積みあげた角樽は、京橋の數寄屋橋邊りからさへ見えた
 と云ふ位、多少の懸値はあるにしても、兎に角非常な景氣であつた事が信せられる。今日では、
 もう當時の景況は見られぬが、それでも賣出す高は大變なもので、神田の豊島屋と云へば、「あ
 あ白酒の本家か」と誰にもうなづかるゝ名物店、東京の商店中に於ても第一に指折らるゝ古顔
 で、更に、信用ある酒店となつて居るのである。豊島屋は當代で十三代目で、當主は吉村政次
 郎と云ふ、明治五年九月の生れ、同じ神田の酒屋石橋重兵衛の二男であつたが、先代因是に男
 子のなかつた處から明治二十七年の九月、娘あき子の婿として迎へられたのである、江戸ッ子
 肌のキビしくした男、先代の遺訓通り、日々雇人と一緒に、眞黒くなつて働いて居る。

大正六年十二月五日印刷
 大正六年十二月八日發行

無遠慮に申上候

定價壹圓卅五錢

著者 河 瀬 蘇 北

發行者 宮 下 軍 平
 東京市神田區錦町一丁目十六番地

印刷人 中 島 藤 太 郎
 東京市神田區錦町三丁目一番地

印刷所 神 田 印 刷 所
 東京市神田區錦町三丁目一番地



發行所

東京市神田區錦町一丁目十六番地
 振替口座東京第三四〇九番

二松堂書店

電話本局三七一七番